

聖書:エペソ人への手紙5章1～20節

説教:光の子として歩む

はじめに

まだ私が札幌に来てまだ間もなかった十代のころ、昼間にすすきのを通ったことがあります。建物や看板がはっきりみえるくらい外は日の光で明るいのに、なにか黒いものが町を包んでいるような不気味な印象を受けて、恐くなったのをいまでも覚えています。それから間もなくして、その時住んでいた寮の先輩に連れられてすすきのに何度も通ううちにそんなことは忘れ、むしろ楽しいところと思うようになりました。今思えば、そうやって闇の中を歩んでいたわけです。

今朝の聖書の箇所「光の子として歩みなさい」とあります。光の子として歩む、ことばとしてはなんとも魅力的で、キラキラ輝く人生、そんなことを連想します。できるなら輝く人生でありたい、だれもがそう願いながら、なかなかそうはいかない。そこで悩んでいる人が多いかもしれない。でも聖書は、キラキラ輝く人生と本当に言っているのか。そうでないなら、ではどのようなことなのか。共に考えてまいります。

## 1 闇の中を歩む

### 1) 行い

そこでいきなり、光の子として歩むことを考えるのではなく、その反対の歩み、闇の中を歩むとはどういうことなのか。そこから入ってみましょう。すぐに思いつくのは、悪いことをする、犯罪ですね。そのような例は新聞やニュースで毎日目にします。あるいはもう少し聖書に近づけて考えれば、偶像礼拝を挙げることができる。それは彫られたものとか、書かれたもの、あるいは木や石を拝むということだけではありません。5節を見ると分かるように、淫らな者、汚れた者、貪る者も含まれる。いずれも悪いことをする、行いのことを指しています。これはわかりやすい。

### 2) 口にすること

ではそれですべてなのか。そうではない。お城というのは、中心に本丸があり、周辺にお堀や塀、門が配置されています。その例で言うと、悪い行いは周辺にあるお堀か塀で、本丸、最も重要な部分は別の所にある。それが3、4節です。「あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、淫らな行いも、どんな汚れも、また貪りも、口にすることさえして

はいけません。また、わいせつなことや、愚かなおしゃべり、下品な冗談もそうです。これらは、ふさわしくありません。むしろ、口にすべきは感謝のことばです。」

ここで中心となっているのは「ことば」です。何を語るのか、語ってはいけないのか。そのことがもっとも重要なこと、本丸だと言っている。これを聞いて不思議に思いませんか。「悪いことはしてはいけません。」これは非常にわかりやすい。私たちは、子どもときからそういうことを何度も聞いてきた。悪いことをするかしないか、実際の行いで判断するという意識があります。

ところがパウロは、「このようなことばを口にしてはいけません」と言って、どうも行いよりも悪いことばを口にするか、しないか、そちらほうがお城の本丸であるかのような扱いをします。悪いことばを言わないのは確かによいことではありますが、ここまで繰り返して強調しなくても思っています。

### 3) 「名づける」

そこで目を留めたいのが、3節にある「口にすることさえしてはいけません」というところです。「口にする」と訳していることば、おもしろいことに別の所では「名づける」とか「名をとる」と訳されていることば。意外だと思いませんか。どうしてこんなことばを使うのか。理由があります。

このことを考えるために、創世記1章創世記1章3～5節を開いてみます。「神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。神は光をよしと見られた。神は光と闇を分けられた。神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。」

光を造られてから、神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけた。ここに名づけるということが出てくる。皆さんも親とか名付け親に名前をつけてもらったはず。名前というのはただAさんとBさんを区別するためのしるしではない。もし区別するだけだというのなら、番号で呼べばよいはず。でもそんなことをしたら人間の扱いではない、囚人と同じだと感じます。それは、名前と存在、その人の人格とくっついていて切り離せないくらい大切なものだという考え方があるからです。奈良時代の

ことですが、当時は自分の本当の名前を世間には知らせない、知っているのは自分と親だけ、その代わりにニックネームで通したそうです。あるいは本名は皆知っているけれど、目上の人を呼ぶ場合は絶対名前を使わない。その代わりに役職で呼ぶ習慣があった。なぜそんなことをしたのかと言えば、名前はいのちそのものという考え方があったからだと思います。実は、聖書にもそのような考え方がある。

そのことを頭に入れてもう一度3節を見てみましょう。口にするのは、この神が造られた世界に存在を呼び戻すことになってしまう。それは悪いことを行うことと、まったく重さは変わらない。それくらいのことですから、「口にしてはいけない」とか「口にするもの恥ずかしい」と言うのです。

その代わりに「口にすべきは感謝のことばです」と言う。この口を与えてくださったのは神です。その同じ口から、神をののしり神をけなすようなことを語り、感謝もしようとしなかった。それが闇の中を歩む者の姿でした。

## 2 いまは光の子どもとして歩む

かつてそのような歩みをしていた私たちは、救われて新しくされ、歩み方も大きく変えられていきます。8節。「あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい。」闇から光へ。実にわかりやすいし覚えやすい。でも、光の子どもとして歩みなさい、と言われても、実際どんなふうにしたら光の子どもになれるのか、そこもわからない。説明がなければ分かりません。

ある方はこんなふう考えたのだそうです。この暗闇の世に、私たちは光となって輝かなければならない。そのためには暗い顔をしてはいけない。明るく輝いてクリスチャンがすばらしいことを世に認めさせるべきだ。これは実際あった話です。

私はこれを聞いてちょっと考え込んでしまいました。人には性格というものがあって、様々です。明るくて積極的、どこにいても輝いているという方はいます。しかし、みながそうではない。私は妻から、「あなたはいるかいかわからない」と言われるくらい、存在感がない。言わなくてもおわりの通り、周りを明るくするような性格ではない。私はとても光の子どもだと言えない、むしろ心にあること、いつも考えていることを見たら、私は闇の子ではないだろうかと思ったりする。

## 3 どのようにして

### 1) キリストを手本にしながら

どうしたらよいか。知りたいのはそのことです。今日は二つのことをポイントとして挙げます。一つ目。たとえば、泳いだことのない人をいきなりプールに連れて行って、さあ泳いでくださいと言っても無理です。クロールはこのようにして、平泳ぎはこのようにして、先生がお手本を示し、生徒はそれを見よう見まねで練習し、だんだん上達していきます。

それと同じように、「光の子として歩む」のも、お手本が必要です。だれがお手本になるのか。1, 2節です。「ですから、愛されている子どもらしく、神に倣う者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストも私たちを愛して、私たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけにえとし、芳ばしい香りを献げてくださいました。」

「キリストも私たちのために愛して」とあって、キリストが私たちのお手本だと言っている。私たちはこの方をお手本にしながら光の子どもとして歩むとはどんなことなのか、教えていただく。それが一つ目のポイントです。

### 2) 暗闇にあるものを明るみに出す

では二つ目のポイント。私たちは、キリストこそ私たちの罪からの救い主ですと信じて、この方を見て、この方をお手本にします。そうしたらなにが起きていくか。キリストは私たちを愛しておられます。ご自分のいのちをお捨てになって、私たちを救おうとされました。その方を見上げるのですから、何も起きないはずはない。キリストが放つ聖い光が私たちを照らします。そうしたら今まで見えなかったものが見えるようになる。そのことが13節にある。「しかし、すべてのものは光によって明るみに引き出され、明らかにされます。」口にするのも恥ずかしいような罪がある。そのことを神の光によって明るみ出して、見えるようにしていく。それが光の子どもとして歩む歩みです。キラキラ輝いて歩みましょう、とは全然違うことがこれでおわかりでしょう。これが二つ目のポイント。

### 3) 霊と心において新しくされ続ける

今二つのポイントを挙げました。光の子として歩むとはどんなことなのか。そんな問いかけから始まった今日のメッセージでしたが、結論は皆さんがすでに知っている内容ではなかったでしょう

か。しかし、知っているからと言って、では光の子として歩んでいますと胸を張って言えるのかというところはまったく自信がないのも事実ではないでしょうか。「私はできていません」と悲しむ方もおられるかもしれません。でも4章23節に、「あなたがたが霊と心において新しくされ続け」ていくのですと書いてあったのを思い出しましょう。自分では年を重ねてくると、あちこちガタ来て希望がなくなり、寂しくなってくる。しかし、私たちは日々新しくされ続けていると言われる。昨日より今日、今日より明日。だんだん変えられていく。たとえどんなに年を重ねてからだが古くなろうとも、日々新しくされ続ける歩みの中にいます。主が私たちのお手本となり、手を引くようにして導いてくださることを覚えて御名をあがめます。